

第一章

神の化身の誕生

——無邪気に遊び暮らした幼少年時代——

ラーマクリシユナ^{バラマハンサ}大覚者は、一八三六年二月十八日、インド西ベンガル州のフグリ地区にあるカマールプクルという村に生まれた。

この村は一番近い町から五十キロ近く離れ、最も近い鉄道の駅まで四十キロという、まことにのどかな場所で、見渡すかぎりの水田や野原にかこまれた有り様は、まるで緑の海に浮かぶ小島であった。あちこちにヤシの一種である背の高いパームの木や、菩提樹、マンゲローヴなどが茂り、貯水池が四つほどある。一番大きいのがハロダリ池といって、後年、ラーマクリシユナの話の中によくでてくる池である。カマールプクルというのは、鍛冶職の村、という意味だが、そのほかにも大工や牛飼や、はた織職人や、農耕者、油屋など、さまざまな職階^{カースト}の人びとが住んでいた。しかし最高のカーストであるバラモン、すなわち僧職は彼の家ただ一軒であった。

父のクデイラム・チヨットパッタエは信仰厚く、正義感の非常に強い人で、村の僧侶として貧しい生活を営んでいた。正統なバラモンが職階の最上位として尊敬されるのは、彼らが社会的地位とか財産とか、普通の人間なら誰でもが欲しがらるものを放棄しているからである。神に仕えることと、聖典を学んで他の人びとに読んできかせたり講義をしたりするのが、彼らの天職なのであって、聖職者といわれるゆえんであり、物質的に貧しいのは当然であろう。本来は村



カマルプクル村へ通ずる道

から四キロほど離れた先祖伝来の地、デレに住んでいたのだが、土地の有力者から偽証を強制され、それを拒んでこの村に移ったのである。容姿端麗で率直、独立不羈ふつきの人物で村人から敬われていた。

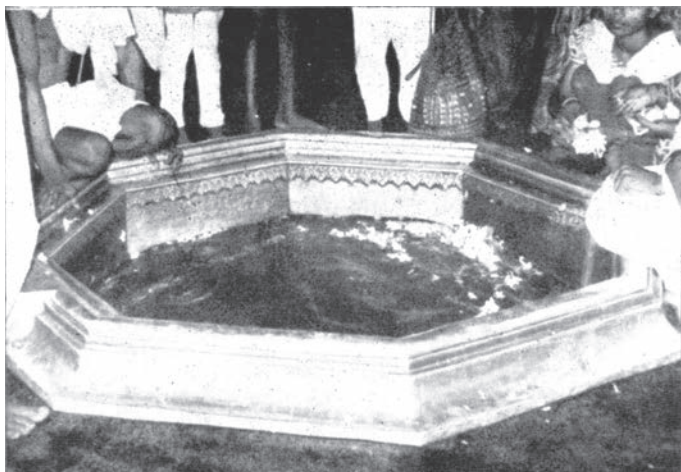
母のチャンドラマニもまことに親切で直々な性格だったので周囲の人びとから慕われた。ただ、あまり正直すぎて前後の都合も考えず、心に浮かんだことは皆しゃべってしまうので、かげで「バカ奥さん」などと呼んでいる者も、いるにはいた。人に食事を出すのが何よりの楽しみで、また近隣の人たちの不幸には、わがことのように喜び、そして悲しみ、骨身惜しまず世話をやいた。ラーマクリシユナは、この両親の性格を多分に受けついでいる。



カマルプクル村の通り

チャンドラマニは十四歳のとき長男のラムカマルを産んだ。この年齢で子供を産むのは、当時のインドではごく当たり前のことである。夫婦がデレを引き払って、この村に移り住んだのはクダイラムが四十歳、長男が十歳、長女カチャニが四歳のときである。純朴な村人たちにかこまれて、おだやかな日々が流れて行く。バラモンの子らしく学問好きな長男は、サンスクリットも一通り勉強して、宗教上の規則や聖典を次つぎと学び、父親のよい助手になつてきた。長女は十一歳のとき、良縁を得て隣村に嫁いで行った。その婚むこの妹が、なかなかいい娘だったので、長男の嫁にもらいうける。ラムカマル十六歳のときである。

まじめな長男は年毎にたのもしくなり、家族の面倒まで見られるようになったので、父親



ガヤのヴィッシュヌの足跡

は以前から行きたいと思っていたインド南端の聖地、ラメスワルに参詣する。ここには、ラーマがセイロンの魔王ラーヴァナを滅ぼしての帰りに祀ったと伝えられているシヴァ大神の像があるのだ。一年がかりの徒歩巡礼であった。参詣から帰った翌年、一八二六年にチャンドラマニは久しぶりに男の子を産んだ。前年の参詣を記念して、この次男はラメスワルという名をつけてもらった。

それからほぼ十年経って、クデイラムは再び巡礼に出かける。今度はヴィッシュヌ神の聖地、ガヤである。この地には、宇宙の維持を司る大神ヴィッシュヌの足跡があるとされ、インド中からの参詣人が絶えない。

この聖地ガヤで、彼は一カ月近く滞在し、心ゆくまで大神を礼拝し、祖先の冥福を祈っ

た。このようなことができた自分の境遇を心から感謝し、もうこれで何も思い残すことはない
と思ひ、今まで経験したことの無い喜びに満ちあふれ、澄みきった気持ちになつて、ガヤでの
最後の夜、眠りについたのである。

光り輝く莊嚴な大寺院の中にクデイラムはいた。大勢の祖先たちがさも嬉しそくに彼のそば
にきて、祝福してくれる。感激のあまり彼は祖先たちの足もとにひれ伏し、涙を流した。その
とたん、聖なる光明がその場に満ちて、祖先たちは左右に別れて、うやうや恭しく合掌する。彼方、きら
めく玉座にゆつたりと坐し給うはまがうかたなき宇宙の主ヴィシューヌ！ お体は緑色にかが
やいている。彼を親しげに見つめていらつしやる。クデイラムは引きよせられるように前に
進み、神の御足に額をつけて拝し、夢中で真言マントラをとなえた。

神はいともやさしい声で彼に言葉をかけられた。

「クデイラム。お前の信仰のほど、見とどけたぞ。わたしは喜んでゐる。ときに、わたしは
お前の息子になつて人間界に生まれるから、かわいがつて育てておくれ。いいね」

何という有難いこと！ 有頂天になつて喜んだ次の瞬間、谷底につき落とされたような悲しみ
がおそつてきた。

「神さま、だめです。私にはそんな資格はありません。私はたいそう貧乏ですから、わが家に
生まれてきて下さつても、満足にお仕えすることはできません」

すると大神ヴィシュヌは慈悲深いほほえみを浮かべ、
「心配することはない、クディラム。だいじょうぶだよ」

もう一度お断りしようか、どうしようかと迷っているうち、彼は目がさめた――。

村に帰ると、妻が、「久しぶりでまた妊娠したようです」と報告した。一八三五年、クディラム六十歳、チャンドラマニ四十四歳のときである。

宇宙の維持を司る大神ヴィシュヌは、必要に応じて人間界に下生し、真の宗教のありかたを教示する、というのがヒンドゥー教の「神の化身」^{アヴァタラ}思想である。例としては、大叙事詩マハーバーラタに登場するクリシュナがそれであり、彼が弟子アルジュナに語った言葉は、千古不滅の智慧の書バガヴァッド・ギーター（神の歌）として、ヒンドゥー教の最高聖典となっている。それから、ラーマヤーナの主人公、アヨーデイヤ国のラーマ王子として下生し、物欲と色欲をほしいままにしてとどまる所なくのさばり返っていた悪鬼ラーヴァナを退治した。

また彼らにとっては仏陀もそれである。バラモン教が墮落し形骸化したときに下生して、道徳を再武装し、正しい道、正しい信仰を説き明かした。だからインドの仏跡や、仏像のあるところではヒンドゥー教徒が実に敬虔な態度で礼拝している。決して異教の開祖などとは考えていない。

さて、翌年の春——暑からず寒からず、万花咲きみだれて風やわらかなファルゲン月の、新月から数えて二日目、すなわち白分二日の日の出前十二分、午前五時、チョットパツダエ家に十年ぶりで男の子が生まれた。このとき、天の星々はまことに吉祥の座相を示していた。宝瓶宮アクリヤスにおいて、太陽スールヤ、水星ブダ、月チャンドラが合をなすシツデイヨーガという座相である。そして木星ブライハスバタイがまさに東の地平線上に昇りつつあり、この赤ん坊の強大な運勢を予告していた。後ほど有名な占星家にみてもらうと、

「この人物は稀にみる大吉祥の生まれであって、徳高く常に善事を行ない、将来は寺院に住んで大勢の弟子たちにかこまれ、その教えは時代をこえて永く世に伝えられ、すべての人から礼拝されるであろう」

ガヤで見たのは正夢だった！ 父クデイラムは喜びと畏れおそで胸を熱くして、わが子の顔をのぞきこむのであった。

はじめ、この吉祥の天宮図にあやかつて、サンブチャンドラと名をつけたが、ガヤでの夢の印象があまりにも強いので、ヴィシュヌ神の異名をとつて、ゴダドルという名前にする。サンスクリット読みではガダーダルで、鋌矛を持つもの、という意味である。幼少時は、ガダイと愛称で呼ばれていた。

第1章 神の化身の誕生



上 ラーマクリシュナの生家

下 ラーマクリシュナの生まれた場所

ガダイ坊やは愛くるしくて元気な子だった。相当ないたずらっ子だったが、父親はガヤでの夢が胸にやきついているので、決してこの子を大声で叱りつけたりなどしない。

「ガダイ坊や、そんなことをしてはいけませんよ」と、おだやかに言うだけ。——家長である父親がこんなふうだから、家でも特別扱いで、わがままいっぱい、のびのびと育てて行く。姉さんなどは、父親から夢の話聞かされているので、時どき幼い弟の足に白壇を供えて挿んだりする。するとこの小さな「未来の聖者様」は、姉の頭にひよいと足をのつけて、



ラーマクリシュナの生家

「よしよし、ナンジはカシーで死ねるゾ」と、のたまう。カシーとはベナレスのこと、この地で死ぬのがヒンドゥー教徒の理想だから、姉さんは大喜びだ。

近所の家にも勝手に出入する。どこの家に行っても、ガダイは大歓迎される。主婦たちは美味しいものがあると、少しとっておく。

「ガダイ坊やが来たら食べさせよう」

四歳になるころ、妹のサルヴァマンガラが生まれた。

やがて、父親はガダイの性格をだんだん知るようになる。まず記憶力がすばらしく優れているのに気がついた。時たま膝の上ののせて、大勢の先祖の名前を聞かせたり、また、神々への短い讃歌や、マハーバーラタやラーマヤナの中の話などを聞かせると、一度で憶えてしまい、



ガダイ（ラーマクリシュナ）の通った村の小学校

かなり日数がたつてからでも、何の間違ひもなくスラスラと父親の言った通りに暗誦してみせるのである。それから、気に入ったことは実に熱心にするが、気に染まないことは、どんなに機嫌をとつてさせようとしても、決してしない。わがままといえはわがままなのだが、これがひどく徹底していた。

村の大地主であるラハ家では、一族の子供や近所の子供たちに読み書きを教えるために学校を開いていた。寺小屋のようなものである。ガダイが五歳になると、父はこの学校に通わせることにした。

教師は一人しかいないが、高学年の子が新生の面倒をよくみるので、いたつて順調に運営されている。子供たちは朝行つて二、三時間勉強してから、家に戻つて食事と水浴をし、また

三時か四時ごろ行つて、日が沈むまで勉強してくる。人なつっこいガダイはたちまち友だちが出来て、はじめの間は嬉々として通つていた。が、そのうちだんだん行く日が少なくなつていった。後年、彼はこの頃のことを思い出しては、信者や弟子たちに面白そうに語つてゐる。

「学校では算術が苦手でほんとに困つたよ。あの符号がさっぱりわからなくてね、算術の時間になるとキョトンとしていた。でも絵はうまかつたよ。それから土で小さな神像を上手にこしらえたものさ」(『不滅の言葉』より)

学校に行かないで何をしていたかという、仲よしの友だちと村外れの方まで行つて遊んだり、野外劇をしている所へ行つて、何度でもあきもせずに見物している。ヤトラと呼ばれる田舎芝居は、そのころ、村人たちの最大の楽しみだった。それから、神話や叙事詩の朗読会があると、一番前に坐つて熱心に聴いている。終わると、読み手の声色こわいや身ぶりまでそっくり真似てみせる。友だちや村人は笑いころげながら大喜びでガダイ少年の物まねを見物する。

たいていの親なら叱りつけて無理にでも学校に行かせるところだが、父のクデイラムは此言こごと一つ言わない。ガダイの好きなようにさせていた。これが偉大な人になるための道筋なのだと信じて疑わない。人並みのことをしては人並みにしかなれない。それにクデイラムは何も夢の啓示や天宮図にだけ頼つてゐるわけではなかつた。ずっと観察してきたところによると、親のひいき目などではなく、ガダイは子供ながら真まじに優れた性格を持つてゐるのだ。父はその



カマールプクル村の収穫後の田んぼ

ことをよく知っていた。この子は、自分の意志で始めたことは必ず最後までやりとげる。決して途中で止めたりしない。それから、かくしごとをしたり、言いわけやウソを決して言わない。そして、他人に迷惑をかけるようなことは決してしない。

六歳のときだった。ある夏の朝、ガダイは小さな籠かごに炒り米を入れて、それを食べながら田んぼの畔道あぜをぶらぶら歩いていた。突然、空の一角に雨を告げる美しい黒雲が現れ、見る見るうちに空一面にひろがった。そのとき、牛乳のように真っ白な鶴の一群が黒雲に向かって飛翔した。その光景のすばらしさに我を失い、ガダイは歓喜のエクスタシーに入ってしまった。外の感覚がなくなり、その場に卒倒した。畑仕事

をしていた人がそれを見つけ、抱きかかえて家に運んでくれたのである。家族は何か病気の徴候ではないかと心配したが、意識が回復すると全く平常と変わらない様子なので、一応安心した。この最初の経験は後年自ら何度も語っていることである。

このようにしてラーマクリシュナの幼年時代は、家族のあたたかい愛情のもとで、申し分なく幸福であつた。彼は自分に対する両親の教育態度や、兄弟の愛情、村人の親切に生涯感謝を忘れず、折にふれてなつかしそうに思い出話をしている。

カマールプクル村は、インド四大聖地の一つであるプリへの道筋にあたっている。村の東南端に聖地プリへ行く道が通っていて、各地から来る参詣人がそこを往き復りかへしていた。大地主のラハ家では道路に面したところに無料宿泊所を設け、修行者や坊さんに奉仕している。ガダイ少年も時おり仲間といっしょにこの辺までやつて来ては、宿泊所の窓から、物めずらしそうに内部なかをのぞいていたものである。

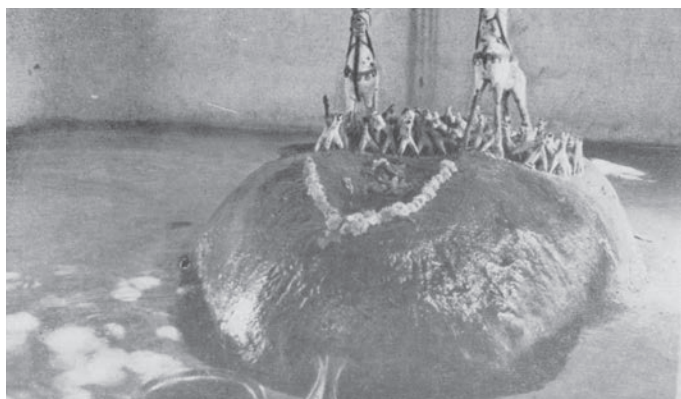
七歳のとき、父親のクディラムが赤痢にかかつて亡くなると、ガダイは次第に孤独を好むようになり、時どき人のいない所で物思いにふけていたが、やがて、この無料宿泊所にせつせと通いはじめた。こんどは内部なかまで入りこんで、薪や水を運んだりして坊さんたちの手伝いをする。インド各地から来たさまざまな種類の行者や出家、巡礼者などの言動を熱心に眺めたり

聞いたりしていた。

八歳のとき、ここに小人数の出家のグループが何かの事情でかなり長い間滞在していたことがある。ガダイはこの坊さんとすっかり仲よしになって、毎日入り浸っていた。時には体に灰をまぶしたり、自分の着物を引き裂いて出家の着る「獅子の衣」の形にして、それを身につけて家へ帰ってくる。体に灰をまぶすのは出家苦行者の習慣である。母は可愛い息子が坊さんたちの後についてどこかへ行ってしまうのではないかと大いに気をもんだ。それに加えて、また気がかりな事件が起こったのである。

四キロと離れていない隣村に、ヴィサラクシ女神という大そう靈驗あらたかな神さまを祀った寺があつて、周囲の村の婦人たちはよくそこへ参詣に行く。ある日、ガダイは親類の婦人たちに連れられて参詣に行くことになった。仲よしの女の子、プラサンナ・ラハもいっしょだった。一同は上機嫌で、女神を讃える歌をうたいながら隣村へ向かつて歩いて行つた。

村境の野原を横切ろうとしたとき、プラサンナといっしょに元氣よく讃歌をうたっていたガダイ少年が突然黙ってしまった。体が硬直し、歓喜の涙を流しながら地から生えたようにつつ立っている。「ガダイ！ ガダイ！」と何度呼んでも返事をしない。完全に外界の意識を失っているのだ。婦人たちは仰天した。日射病にかかったのではないかと思つて、一生懸命に扇であおいだり、近くの池から水をくんで来てガダイの頭にかけたり、目のあたりにふりかけ



ヴィサラクシ女神を祀った寺

たりするのだが、効果はなかった。

困り果てていると、プラサンナが、「お詣りに行く途中でこうなったのだから、女神さまに助けをただきましよう」と、提案した。そこで彼女の言う通りにして、ヴィサラクシの名をとえながら、皆で祈ったところ、驚いたことにガダイはにっこり笑って、だんだん意識をとりもどしてきたのである。婦人たちは有難涙にくれながら、まるでそこに立っているガダイがヴィサラクシ女神であるかのような感じになって、女神の名をとええてはガダイを礼拝し続けた。意識が元通りになると、けろりとして相変わらず元気がいいので、そのまま参詣をすませて村に戻った。親類の婦人は一部始終を母に話したので、母チャンドラマニは六歳のときの出来事と思いついて、また心配になってきたのである。

また翌年、シヴァ神の祭日に近くの村の素人芝居

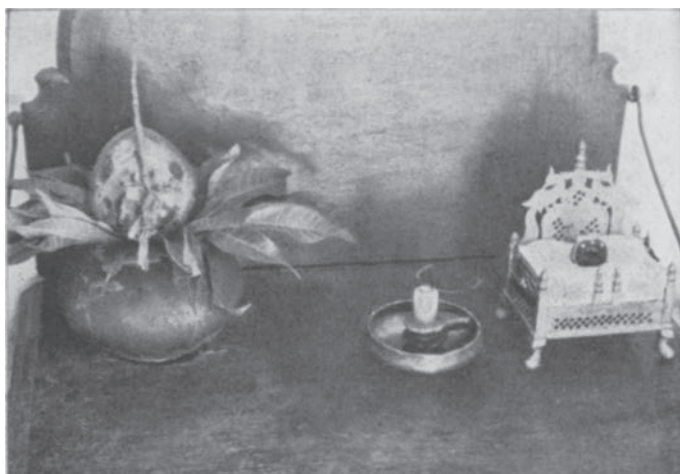


シヴァ神の宗教劇が演じられた家

の一座が来て宗教劇を演ずることになったのだが、シヴァ神の役になるはずの少年が急病になってしまった。皆の希望でガダイがその役をすることになり、頭髪をちぢらせて体に灰をまぶし、虎の皮を腰に巻き、三叉の戟ほこを手に持ち、おごそかな足どりで観衆の前に現れ出た。そのとき突如として彼の精神は神聖なるシヴァ神に支配され、歓喜の涙を流しながら彫像のよう

に舞台につつ立ったまま、全く外界の意識を失ってしまった。顔が輝いていた。見物人は真実のシヴァ神を見たような気がして、どっとどよめく。こんな素晴らしいシヴァ役者が今まであっただろうか。村中の人が心から賞讃したけれど、彼の忘我の状態は三日近くも続き、家族の不安はますますつのつていった。

九歳になったとき、長兄ラムクマルは弟のためにウパナヤスウパナヤス聖系拝受の式を盛大にとり行なった。これで一人前のバラモンとして正式に認められたことになるのである。以後、家の祭神を礼拝することを許されたので、ガダイ少年は例によって全身全霊をうちこんで



チヨットパッダ工家の祭神 (左から)シータラー、シヴァ、ラグヴィル

礼拝と神前の瞑想に没頭する。家の神はラグヴィルと呼ばれて、ラグ族の英雄、即ちラーマの姿をとった宇宙の主ヴィシニューである。六歳、八歳、九歳のときと三度経験した入三昧サマーディは、この時分からかなり頻繁に起こるようになった。

神前で瞑想したり、人が讃歌を上手に歌っているのを聞いていたりするとき、突然圧倒的な歓喜に包まれて外界の意識を失う。また、一つの神に心を集中していると、心眼にその本当の姿が映じ、外部の感覚はたちまち激情の波に呑み込まれてしまうのであった。母親をはじめとして親類の人々は、脳の病気ではないかと心配するのだが、本人にしてみると全く自然的自発的なことなので少しも苦にならない。それに三昧の状態が過ぎると、直ぐに

元通りの元氣な平常に戻るのである。だから彼は親類の人たちに、この「発作」を気にしないようにと頼んだ。

三昧が度重なるにつれ、彼の精神にある神聖な感銘を残したにはちがいないが、そのため子供らしさが失われることはなかった。ガダイ少年の言語動作は常に自由快活で、その精神生活にさほど重大なことが起こったとも思われなかった。三昧に入ると超自然的なものに近づき、神性に触れると信じてはいたが、周囲から見ると、その日常には何も異常な点は認められないし、彼がいる所には笑い声が絶えず、その場が明るくなるので、誰からも好かれていた。この性質は生涯変わらない。

一般に宗教家または詩人がエクスタシーに入ることによく記録されているが、これはすでに多くの修行や修練を積んだ場合に起こることである。ラーマクリシュナが幼いころからこのような状態に入ったとすれば、こうした方面に特別の知識を持たない家族の人が心配したのも無理はない。

ここで思い出されるのは、仏陀伝説のことである。仏陀が幼いとき、他の子供たちが嬉々としてたわむれている間に禅定に入った。そして時がたつにしたがつて他の樹々の蔭は移ったが、仏陀の上の樹だけは蔭を移さなかったという、あの伝説である。一般にラーマクリシュナの伝記

作者はほとんど意識していないようであるが、仏陀伝説との一致または類型といえよう。

ところが彼自身または弟子たちが意識的に仏陀伝説を模倣したとは全く考えられない。というのは、仏陀幼時の三昧のような仏陀に関する詳細な事跡を、彼らは何も知らなかったと信じられるからである。当時のベンガルにおいては、社会の表面に、「仏教徒」と称する人々がほとんどいなかった、後にラーマクリシュナはインドで行なわれていた各種の宗教宗派の奥義を自ら体得するのだが、そのなかに仏教が入っていなかったのは、その理由によるものと思われる。

仏陀の場合も、ラーマクリシュナの場合も、この幼時からの入三昧というのは、インドにおいて精神的大偉人の出現するとき、当然期待してもよい出来事なのである。言いかえれば、少なくともインド人の精神生活の上から見て、真の宗教家たるべき人についてある類型が要求されているということである。

父クデイラムの死後は、長兄のラムクマル夫妻が一家の全責任を負って生計をたて、老母の世話をし、まだ年少の弟妹たちを育てていた。ガダイについては、時おり意識不明の状態になることでもあり、父の教育方針を受けついで無理に学校に通わせようとはせず、本人のしたいようにさせていた。



ガダイ少年たちが演劇を上演していたマンゴー園

ガダイ少年は生まれながらにして美しいものに対する鋭敏な感覚を持っていたらしい。たとえば、村の壺焼き職人のところに通って熱心に土の像の作り方を学び、シヴァの小さな神像などを実に見事にこしらえて、遊び仲間といっしょに拝んだりしていた。神像の巧拙こうせつを批評することが上手なので、鑑識を頼まれることも時おりあったほどである。ことに愛好したのは、音楽

と詩と宗教劇で、これは一生涯続いた。

村には田舎芝居の小一座が三つあったが、彼は役者の真似をするのがたいそう上手で、終いには役者よりうまくなってしまふ。真似だけでは我慢できなくなつて、仲間と語らつて演劇グループを作り、演出家兼俳優となり、野原の樹の下で上演する。女役でも何でもこなす。あまりうまいので、通りすがりの人などは、「あの少年はカルカッタの○○劇団にいたのではないか」と、全国的に有名な劇団の名を言つて村の人に尋ねたりする。村人はわがことのように得意になる、というふうであつた。プラーナ（神話）をはじめ、マハーバーラタやラーマヤナの筋をよく憶えていて、その語り

方は専門の講釈師^{カク}も及ばぬほど実に魅力的なので、村の婦人たちは争つて聞きたがった。

誰に教わったわけでもないのに、歌の上手なことは非常なもので、甘くやさしい声と絶妙な節まわしに、聞く人は誰でもため息をつく。これは大覚者と呼ばれるようになってからでも同じで、言行録『不滅の言葉』^{コタムリト}の著者も、その中でしばしば「音楽の神もハダシで逃げ出すような」という形容を用いている。それらの古典は、ごく幼い頃父の膝の上でいくらか聞かされた部分もあるだろうが、大方は講釈師から聞いておぼえたものである。ベンガルの村々には講釈師がよくまわつてきて、教養のない大衆を相手に説教したりプラーナ等の物語を聞かせたりする。これが人々の耳学問になつていたのである。

そのほかに、この地方ではチャイタニヤ派の影響が非常に強かつたと思われる。後年のラーマクリシュナに対するチャイタニヤ派の影響といふことは、なお研究を要する問題である。

チャイタニヤ（一四八五—一五三三）はベンガル州のナディアに生まれた宗教家で、はじめ哲学及びサンスクリットに造詣深い学者として有名だったが、悟るところあつて信仰生活に入り、形式的な宗教の殻を破つて、神との結合にもとづく愛の信仰^{バクタイ}——信愛の思想を街頭で説教した。太鼓を鳴らし、旗を立て、キールタンと呼ぶ新様式の音楽に合わせて神を讚美し、人間の魂の憧れを歌い、またハリ・クリシュナと唱えながら市中を行進し村々をまわつた。多くの市町村民がこの列に加わり、中には興奮のあまり失神するものも出たという。

この派の狂信的な騒々しい礼讃行と、ラーマクリシュナの静的な瞑想生活との間には、一見何も共通なものがないかのように見えるかも知れないが、ラーマクリシュナの内面的に強烈な信仰、十二年間の苦惱時代の激情、ことにクリシュナに対するラーダーの愛を身を以て体験したこと等、恐らく幼時以来のチャイタニヤ派の影響によるものではないかと想像されるのである。

しかし、この礼讃行を開始した当時はカーリー女神の崇拜者たちから嘲笑されたとか、またチャイタニヤはヴェーダーンタ・スートラの解釈において、「シャンカラはバーダラーヤナの真意（パリーマツダ）を曲解して化現説を以て解した」として、シャンカラの説に反対したと言われているから、カーリー女神の崇拜から出発し、シャンカラの哲学を学んだといわれるラーマクリシュナとは大いに軌を異にする^{こと}と考えられないこともない。しかしチャイタニヤは出身地であるベンガル一帯に最も強い影響を残したこと、ことに十七世紀前半以後、この派のなから多くのすぐれた讚美歌の作家があらわれ、民衆文学の形でこの地方一帯にバクティ思想が滲透していたことを思えば、ラーマクリシュナの幼少年時代に最も深い感銘を与えたのは、直接にチャイタニヤの教義ではないまでも、この通俗化された礼讃文学であつたらうと想像される。

先天的に宗教および芸術に対して鋭い感受性を持つ幼少年期のラーマクリシュナが、それらに強い感激を覚えなかつたはずはないと思ふ。後に、ベンガル出身の詩聖タゴールの詩にもチャイタニヤ派運動の詩が強く影響を及ぼしているのである。晩年の言行録の中で、ラーマ

クリシユナが歌ったり信者たちが合唱したりする宗教歌には、チャイタニヤ派のすばらしい民謡風の讃歌が数多く出てくる。

月日は移り年が経つ間に、チョットパツダエ家のなかにもさまざまな変化があった。ガダイ少年が十二歳のとき、次兄ラメスワルが結婚し、次いで妹のサルヴァマンガラが九歳で嫁に行った。インドでは娘の結婚に大変な費用がかかる。父親が亡くなって長兄の代になってから、家の経済状態はどうも思わしくなかったが、このころからいちだんと悪くなっていく。しかし石女うまめだと思われていた長兄の妻が初めて妊娠したので、一家は喜びに包まれた。それも束の間、兄嫁は妊娠してから人が変わったようになり、老いた姑や弟の世話どころか、家事も投げやりになり、乱暴な口のききかたをするようになった。妊娠しているせいだろうと思つて皆は腫れはものにさわるようにしていたが、その兄嫁は月満ちて男の子を生むと、産褥さんじよくの床で死んでしまった。

生まれたばかりの赤ん坊の世話と家事一切は、六十近い母の肩にかかつてくる。ガダイは外に遊びに行くことがだんだん少なくなり、家で母親の家事を手伝っていた。すると村の婦人たちは機会をみてはガダイの家に来て上がりこみ、彼の歌や話をききたがつてせがむ。彼は婦人たちの希望をできるだけ叶えてやった。ガダイが何か母親の手伝いをしていると、彼女たちが

さつさとその仕事をして終わらせてしまふのである。

十とおをいくつか過ぎてても相変わらず子供供つぽく無邪気で、一見いかにも呑気そうだったが、彼は醒めた目で世間の有り様を観みていた。ことに女性というものを鋭く観察していた。

土地や財産が原因で人々は争い、仲のよかつた親せきも金のために仇同士となる。

「見なさい、金や財産は禍わざわいのもとだ。お前たち兄弟が仲よくやつていても、財産のわけ前をもらう段になるとイザコザがはじまる。犬どもが体をペロペロなめつこして機嫌よくしているところへ飼主が食物を投げてやると、たちまち咬み合いをはじめる」〔不滅コタムリトの言葉〕一八八四年

五月二十四日より

やつと財産ができたかと思うと、病氣になつてあつけなく死んでしまふ。男たちは女房子供を養い、世間並みのことをしてやるために汗水たらして金を稼ぐ。男はその金のためにどれほど卑屈になることか。一生、女と金の奴隷だ。——そして、この世の「幸福」のはかなさ。「二日ばかりの」幸福を追い求めて人々はかけずりまわる。いったい何のために、何故、人間は性懲りもなく愚かなことをくりかえすのだろうか？——「ラクダが口から血をたらしたら流しながら、いつまでもトゲ草を食べているように」

それから女！ どんなに秀れた男でも、女につかまったら最後だ。いっしょに暮らしていると、男はどうしても女にはかなわない。いつの間にか支配されてしまふ。女というものは——

「放っておけば三千世界の隅^{すみ}すみまで食いつくす」

また一方には、無料宿泊所で会う出家修行者たちのような生活もあるのだ。彼らのなかには、身につけているのは腰布一枚、所持品は水筒と椀一つ、それからバガヴァッド・ギーターの小さな本が一冊だけという人もいるが、その人たちの眼の何と明るいことか。そして話すことの何と深く大きいことか。

ラーマクリシュナはこの十代の半^{なか}ごろには、出家するとまではつきり決心しないまでも、自分は決して「女^{カミニー}と金^{カンチヨン}」の虜^{とりこ}囚^なにはなるまい、粗衣粗食に満足して、神に仕える一生を送ろうと決意していたと思われる。

さて、長兄ラムクマルは父親の死後、一家の生計を支えるため悪戦苦闘していた。粗末な食事にやっと間に合うほどの収穫がある田畑は所有していたが、僧職としての謝礼だけでは、その他の費用がまかないきれない。生まれてすぐ母親に死なれた息子には、毎日牛乳を買って飲ませてやらなくてはならないし、母や弟の衣類も必要だ。すでに借金もかなりあるが、返すあてなどあるうはずがなかった。困り果てたラムクマルは、友人のすすめもあって、村の生活に見切りをつけ、単身カルカッタへ出て収入の途を見つけることにした。一八四九年のことである。友人が紹介してくれた僧侶としての仕事のほかに、学問に自身のある彼は、サンスクリット

の塾を開く。そこは大都會である。数人の生徒がすぐ集まったし、彼の学識と誠実な人柄が知れわたるにつれ、次第に仕事も生徒も増えていった。

ラムクマルは一年に一度は必ず村に戻って来て、二週間ほど泊まっていく。老母チャンドラマニ、弟ゴダドル、幼い息子アクシャイの様子を見、持ち帰った金で不足のものを補い、家の修理の手配などもして、またカルカッタへ帰って行く。何度かそれをくりかえしているうちに弟ゴダドルをカルカッタに連れて行こうと考えるようになった。仕事が忙しくなると、助手がほしくなったのも理由の一つだが、このまま弟を村におくことは、将来のためにならないと思つたからである。

もう十代も半ばを過ぎたというのに、いっこうに勉強する気配もなく、相変わらず気の合つた仲間や村の女たちを相手に、歌をうたつたりおしゃべりをしたりして呑気に遊び暮らしている。むろん、老母の手伝いも一生懸命するし、アクシャイの子守りもしてくる。しかし、よく見ると子守りと言うより、何のことはない、幼児といっしょになつて遊びたわむれているのだ。カルカッタに連れて行って、自分の助手としてバラモンの正規の仕事をおぼえさせよう。塾の手伝いもさせよう。そうすれば自然にサンスクリットもおぼえる気になるだろう……。

母や親類の人たちも賛成してくれ、本人にも異存がなかつたので、ラムクマルは吉日をボク卜して家神ラグヴィルにあいさつ申し上げ、弟をつれてカルカッタへ出発した。

ラーマクリシュナ大覚者は、一八三六年二月十八日、インド西ベンガル州のフグリ地区にあるカマールプクルという村に生まれた。

この村は一番近い町から五十キロ近く離れ、最も近い鉄道の駅まで四十キロという、まことにのどかな場所で、見渡すかぎりの水田や野原にかこまれた有り様は、まるで緑の海に浮かぶ小島であった。あちこちにヤシの一種である背の高いパームの木や、菩提樹、マンゲローヴなどが茂り、貯水池が四つほどある。一番大きいのがハロダリ池といって、後年、ラーマクリシュナの話の中によくでてくる池である。カマールプクルというのは、鍛冶職の村、という意味だが、そのほかにも大工や牛飼や、はた織職人や、農耕者、油屋など、さまざまな職階カーストの人びとが住んでいた。しかし最高のカーストであるバラモン、すなわち僧職は彼の家ただ一軒であった。

父のクデイラム・チヨットパッタエは信仰厚く、正義感の非常に強い人で、村の僧侶として貧しい生活を営んでいた。正統なバラモンが職階の最上位として尊敬されるのは、彼らが社会的地位とか財産とか、普通の人間なら誰でもが欲しがらるものを放棄しているからである。神に仕えることと、聖典を学んで他の人びとに読んできかせたり講義をしたりするのが、彼らの天職なのであって、聖職者といわれるゆえんであり、物質的に貧しいのは当然であろう。本来は村



カマルプクル村へ通ずる道

から四キロほど離れた先祖伝来の地、デレに住んでいたのだが、土地の有力者から偽証を強制され、それを拒んでこの村に移ったのである。容姿端麗で率直、独立不羈ふつきの人物で村人から敬われていた。

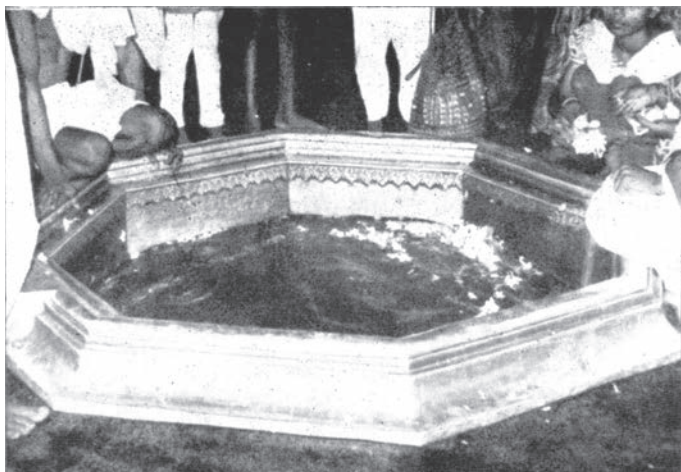
母のチャンドラマニもまことに親切で直々な性格だったので周囲の人びとから慕われた。ただ、あまり正直すぎて前後の都合も考えず、心に浮かんだことは皆しゃべってしまうので、かげで「バカ奥さん」などと呼んでいる者も、いるにはいた。人に食事を出すのが何よりの楽しみで、また近隣の人たちの不幸には、わがことのように喜び、そして悲しみ、骨身惜しまず世話をやいた。ラーマクリシユナは、この両親の性格を多分に受けついでいる。



カマルプクル村の通り

チャンドラマニは十四歳のとき長男のラムカマルを産んだ。この年齢で子供を産むのは、当時のインドではごく当たり前のことである。夫婦がデレを引き払って、この村に移り住んだのはクダイラムが四十歳、長男が十歳、長女カチャニが四歳のときである。純朴な村人たちにかこまれて、おだやかな日々が流れて行く。バラモンの子らしく学問好きな長男は、サンスクリットも一通り勉強して、宗教上の規則や聖典を次つぎと学び、父親のよい助手になつてきた。長女は十一歳のとき、良縁を得て隣村に嫁いで行った。その婚むこの妹が、なかなかいい娘だったので、長男の嫁にもらいうける。ラムカマル十六歳のときである。

まじめな長男は年毎にたのもしくなり、家族の面倒まで見られるようになったので、父親



ガヤのヴィッシュヌの足跡

は以前から行きたいと思っていたインド南端の聖地、ラメスワルに参詣する。ここには、ラーマがセイロンの魔王ラーヴァナを滅ぼしての帰りに祀ったと伝えられているシヴァ大神の像があるのだ。一年がかりの徒歩巡礼であった。参詣から帰った翌年、一八二六年にチャンドラマニは久しぶりに男の子を産んだ。前年の参詣を記念して、この次男はラメスワルという名をつけてもらった。

それからほぼ十年経って、クディラムは再び巡礼に出かける。今度はヴィッシュヌ神の聖地、ガヤである。この地には、宇宙の維持を司る大神ヴィッシュヌの足跡があるとされ、インド中からの参詣人が絶えない。

この聖地ガヤで、彼は一カ月近く滞在し、心ゆくまで大神を礼拝し、祖先の冥福を祈っ

た。このようなことができた自分の境遇を心から感謝し、もうこれで何も思い残すことはない
と思ひ、今まで経験したことの無い喜びに満ちあふれ、澄みきった気持ちになつて、ガヤでの
最後の夜、眠りについたのである。

光り輝く莊嚴な大寺院の中にクデイラムはいた。大勢の祖先たちがさも嬉しそうに彼のそば
にきて、祝福してくれる。感激のあまり彼は祖先たちの足もとにひれ伏し、涙を流した。その
とたん、聖なる光明がその場に満ちて、祖先たちは左右に別れて、うやうや恭しく合掌する。彼方、きら
めく玉座にゆつたりと坐し給うはまがうかたなき宇宙の主ヴィシューヌ！ お体は緑色にかが
やいている。彼を親しげに見つめていらつしやる。クデイラムは引きよせられるように前に
進み、神の御足に額をつけて拝し、夢中で真言マントラをとなえた。

神はいともやさしい声で彼に言葉をかけられた。

「クデイラム。お前の信仰のほど、見とどけたぞ。わたしは喜んでゐる。ときに、わたしは
お前の息子になつて人間界に生まれるから、かわいがつて育てておくれ。いいね」

何という有難いこと！ 有頂天になつて喜んだ次の瞬間、谷底につき落とされたような悲しみ
がおそつてきた。

「神さま、だめです。私にはそんな資格はありません。私はたいそう貧乏ですから、わが家に
生まれてきて下さつても、満足にお仕えすることはできません」

すると大神ヴィシュヌは慈悲深いほほえみを浮かべ、
「心配することはない、クデイラム。だいじょうぶだよ」

もう一度お断りしようか、どうしようかと迷っているうち、彼は目がさめた――。

村に帰ると、妻が、「久しぶりでまた妊娠したようです」と報告した。一八三五年、クデイラム六十歳、チャンドラマニ四十四歳のときである。

宇宙の維持を司る大神ヴィシュヌは、必要に応じて人間界に下生し、真の宗教のありかたを教示する、というのがヒンドゥー教の「神の化身」^{アヴァタラ}思想である。例としては、大叙事詩マハーバーラタに登場するクリシュナがそれであり、彼が弟子アルジュナに語った言葉は、千古不滅の智慧の書バガヴァッド・ギーター（神の歌）として、ヒンドゥー教の最高聖典となっている。それから、ラーマヤーナの主人公、アヨーデイヤ国のラーマ王子として下生し、物欲と色欲をほしいままにしてとどまる所なくのさばり返っていた悪鬼ラーヴァナを退治した。

また彼らにとっては仏陀もそれである。バラモン教が墮落し形骸化したときに下生して、道徳を再武装し、正しい道、正しい信仰を説き明かした。だからインドの仏跡や、仏像のあるところではヒンドゥー教徒が実に敬虔な態度で礼拝している。決して異教の開祖などとは考えていない。

さて、翌年の春——暑からず寒からず、万花咲きみだれて風やわらかなファルゲン月の、新月から数えて二日目、すなわち白分二日の日の出前十二分、午前五時、チョットパツダエ家に十年ぶりで男の子が生まれた。このとき、天の星々はまことに吉祥の座相を示していた。宝瓶宮アクリヤスにおいて、太陽スールヤ、水星ブダ、月チャンドラが合をなすシツデイヨーガという座相である。そして木星ブライハスバタイがまさに東の地平線上に昇りつつあり、この赤ん坊の強大な運勢を予告していた。後ほど有名な占星家にみてもらうと、

「この人物は稀にみる大吉祥の生まれであって、徳高く常に善事を行ない、将来は寺院に住んで大勢の弟子たちにかこまれ、その教えは時代をこえて永く世に伝えられ、すべての人から礼拝されるであろう」

ガヤで見たのは正夢だった！ 父クデイラムは喜びと畏れおそで胸を熱くして、わが子の顔をのぞきこむのであった。

はじめ、この吉祥の天宮図にあやかつて、サンブチャンドラと名をつけたが、ガヤでの夢の印象があまりにも強いので、ヴィシュヌ神の異名をとつて、ゴダドルという名前にする。サンスクリット読みではガダーダルで、鋌矛を持つもの、という意味である。幼少時は、ガダイと愛称で呼ばれていた。

第1章 神の化身の誕生



上 ラーマクリシュナの生家

下 ラーマクリシュナの生まれた場所

ガダイ坊やは愛くるしくて元気な子だった。相当ないたずらっ子だったが、父親はガヤでの夢が胸にやきついているので、決してこの子を大声で叱りつけたりなどしない。

「ガダイ坊や、そんなことをしてはいけませんよ」と、おだやかに言うだけ。——家長である父親がこんなふうだから、家でも特別扱いで、わがままいっぱい、のびのびと育てて行く。姉さんなどは、父親から夢の話聞かされているので、時どき幼い弟の足に白壇を供えて挿んだりする。するとこの小さな「未来の聖者様」は、姉の頭にひよいと足をのつけて、



ラーマクリシュナの生家

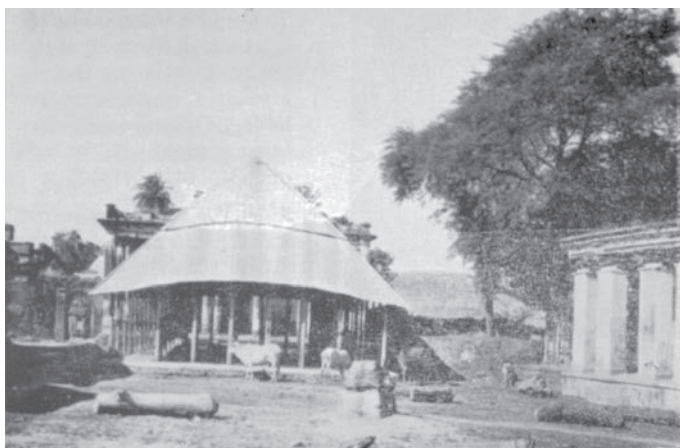
「よしよし、ナンジはカシーで死ねるゾ」と、のたまう。カシーとはベナレスのこと、この地で死ぬのがヒンドゥー教徒の理想だから、姉さんは大喜びだ。

近所の家にも勝手に出入する。どこの家に行っても、ガダイは大歓迎される。主婦たちは美味しいものがあると、少しとっておく。

「ガダイ坊やが来たら食べさせよう」

四歳になるころ、妹のサルヴァマンガラが生まれた。

やがて、父親はガダイの性格をだんだん知るようになる。まず記憶力がすばらしく優れているのに気がついた。時たま膝の上ののせて、大勢の先祖の名前を聞かせたり、また、神々への短い讃歌や、マハーバーラタやラーマーヤナの中の話などを聞かせると、一度で憶えてしまい、



ガダイ（ラーマクリシュナ）の通った村の小学校

かなり日数がたつてからでも、何の間違ひもなくスラスラと父親の言った通りに暗誦してみせるのである。それから、気に入ったことは実に熱心にするが、気に染まないことは、どんなに機嫌をとつてさせようとしても、決してしない。わがままといえはわがままなのだ、これがひどく徹底していた。

村の大地主であるラハ家では、一族の子供や近所の子供たちに読み書きを教えるために学校を開いていた。寺小屋のようなものである。ガダイが五歳になると、父はこの学校に通わせることにした。

教師は一人しかいないが、高学年の子が新生の面倒をよくみるので、いたつて順調に運営されている。子供たちは朝行つて二、三時間勉強してから、家に戻つて食事と水浴をし、また

三時か四時ごろ行つて、日が沈むまで勉強してくる。人なつっこいガダイはたちまち友だちが出来て、はじめの間は嬉々として通つていた。が、そのうちだんだん行く日が少なくなつていった。後年、彼はこの頃のことを思い出しては、信者や弟子たちに面白そうに語つてゐる。

「学校では算術が苦手でほんとに困つたよ。あの符号がさっぱりわからなくてね、算術の時間になるとキョトンとしていた。でも絵はうまかつたよ。それから土で小さな神像を上手にこしらえたものさ」(『不滅の言葉』より)

学校に行かないで何をしていたかという、仲よしの友だちと村外れの方まで行つて遊んだり、野外劇をしている所へ行つて、何度でもあきもせずに見物している。ヤトラと呼ばれる田舎芝居は、そのころ、村人たちの最大の楽しみだった。それから、神話や叙事詩の朗読会があると、一番前に坐つて熱心に聴いている。終わると、読み手の声色こわいや身ぶりまでそっくり真似てみせる。友だちや村人は笑いころげながら大喜びでガダイ少年の物まねを見物する。

たいていの親なら叱りつけて無理にでも学校に行かせるところだが、父のクデイラムは此言こごと一つ言わない。ガダイの好きなようにさせていた。これが偉大な人になるための道筋なのだと信じて疑わない。人並みのことをしては人並みにしかなれない。それにクデイラムは何も夢の啓示や天宮図にだけ頼つてゐるわけではなかつた。ずっと観察してきたところによると、親のひいき目などではなく、ガダイは子供ながら真まじに優れた性格を持つてゐるのだ。父はその



カマールプクル村の収穫後の田んぼ

ことをよく知っていた。この子は、自分の意志で始めたことは必ず最後までやりとげる。決して途中で止めたりしない。それから、かくしごとをしたり、言いわけやウソを決して言わない。そして、他人に迷惑をかけるようなことは決してしない。

六歳のときだった。ある夏の朝、ガダイは小さな籠かごに炒り米を入れて、それを食べながら田んぼの畔道あぜをぶらぶら歩いていた。突然、空の一角に雨を告げる美しい黒雲が現れ、見る見るうちに空一面にひろがった。そのとき、牛乳のように真っ白な鶴の一群が黒雲に向かって飛翔した。その光景のすばらしさに我を失い、ガダイは歓喜のエクスタシーに入ってしまった。外の感覚がなくなり、その場に卒倒した。畑仕事

をしていた人がそれを見つけ、抱きかかえて家に運んでくれたのである。家族は何か病気の徴候ではないかと心配したが、意識が回復すると全く平常と変わらない様子なので、一応安心した。この最初の経験は後年自ら何度も語っていることである。

このようにしてラーマクリシュナの幼年時代は、家族のあたたかい愛情のもとで、申し分なく幸福であつた。彼は自分に対する両親の教育態度や、兄弟の愛情、村人の親切に生涯感謝を忘れず、折にふれてなつかしそうに思い出話をしている。

カマールプクル村は、インド四大聖地の一つであるプリへの道筋にあたっている。村の東南端に聖地プリへ行く道が通っていて、各地から来る参詣人がそこを往き復りかへしていた。大地主のラハ家では道路に面したところに無料宿泊所を設け、修行者や坊さんに奉仕している。ガダイ少年も時おり仲間といっしょにこの辺までやつて来ては、宿泊所の窓から、物めずらしそうに内部なかをのぞいていたものである。

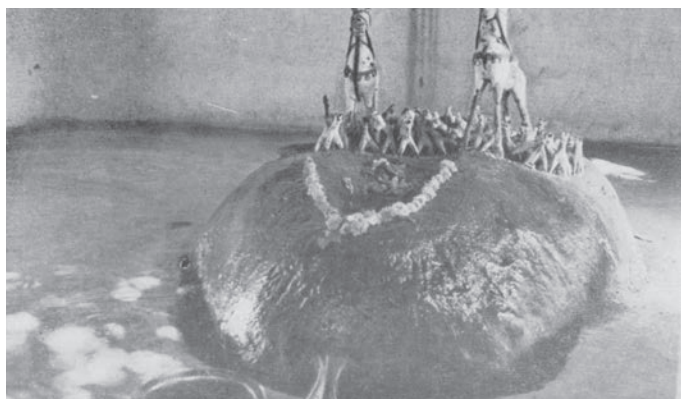
七歳のとき、父親のクディラムが赤痢にかかつて亡くなると、ガダイは次第に孤独を好むようになり、時どき人のいない所で物思いにふけていたが、やがて、この無料宿泊所にせつせと通いはじめた。こんどは内部なかまで入りこんで、薪や水を運んだりして坊さんたちの手伝いをする。インド各地から来たさまざまな種類の行者や出家、巡礼者などの言動を熱心に眺めたり

聞いたりしていた。

八歳のとき、ここに小人数の出家のグループが何かの事情でかなり長い間滞在していたことがある。ガダイはこの坊さんとすっかり仲よしになって、毎日入り浸っていた。時には体に灰をまぶしたり、自分の着物を引き裂いて出家の着る「獅子の衣」の形にして、それを身につけて家へ帰ってくる。体に灰をまぶすのは出家苦行者の習慣である。母は可愛い息子が坊さんたちの後についてどこかへ行ってしまうのではないかと大いに気をもんだ。それに加えて、また気がかりな事件が起こったのである。

四キロと離れていない隣村に、ヴィサラクシ女神という大そう靈驗あらたかな神さまを祀った寺があつて、周囲の村の婦人たちはよくそこへ参詣に行く。ある日、ガダイは親類の婦人たちに連れられて参詣に行くことになった。仲よしの女の子、プラサンナ・ラハもいっしょだった。一同は上機嫌で、女神を讃える歌をうたいながら隣村へ向かつて歩いて行つた。

村境の野原を横切ろうとしたとき、プラサンナといっしょに元氣よく讃歌をうたっていたガダイ少年が突然黙ってしまった。体が硬直し、歓喜の涙を流しながら地から生えたようにつつ立っている。「ガダイ！ ガダイ！」と何度呼んでも返事をしない。完全に外界の意識を失っているのだ。婦人たちは仰天した。日射病にかかったのではないかと思つて、一生懸命に扇であおいだり、近くの池から水をくんで来てガダイの頭にかけたり、目のあたりにふりかけ



ヴィサラクシ女神を祀った寺

たりするのだが、効果はなかった。

困り果てていると、プラサンナが、「お詣りに行く途中でこうなったのだから、女神さまに助けをただきましよう」と、提案した。そこで彼女の言う通りにして、ヴィサラクシの名をとえながら、皆で祈ったところ、驚いたことにガダイはにっこり笑って、だんだん意識をとりもどしてきたのである。婦人たちは有難涙にくれながら、まるでそこに立っているガダイがヴィサラクシ女神であるかのような感じになって、女神の名をとええてはガダイを礼拝し続けた。意識が元通りになると、けろりとして相変わらず元気がいいので、そのまま参詣をすませて村に戻った。親類の婦人は一部始終を母に話したので、母チャンドラマニは六歳のときの出来事と思いついて、また心配になってきたのである。

また翌年、シヴァ神の祭日に近くの村の素人芝居

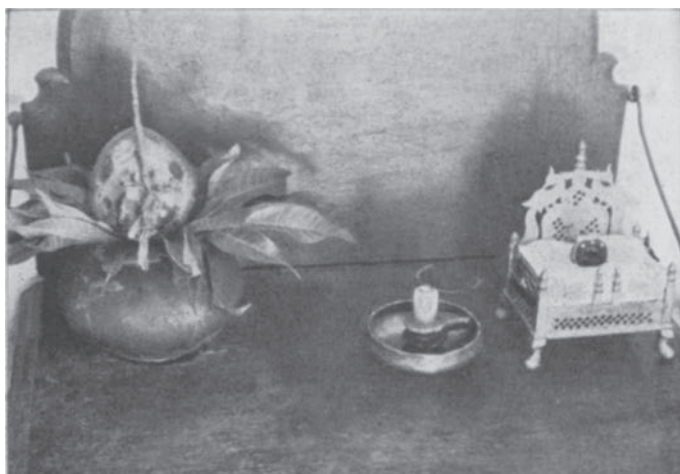


シヴァ神の宗教劇が演じられた家

の一座が来て宗教劇を演ずることになったのだが、シヴァ神の役になるはずの少年が急病になってしまった。皆の希望でガダイがその役をすることになり、頭髪をちぢらせて体に灰をまぶし、虎の皮を腰に巻き、三叉の戟ほこを手に持ち、おごそかな足どりで観衆の前に現れ出た。そのとき突如として彼の精神は神聖なるシヴァ神に支配され、歓喜の涙を流しながら彫像のよう

に舞台につつ立ったまま、全く外界の意識を失ってしまった。顔が輝いていた。見物人は真実のシヴァ神を見たような気がして、どっとどよめく。こんな素晴らしいシヴァ役者が今まであっただろうか。村中の人が心から賞讃したけれど、彼の忘我の状態は三日近くも続き、家族の不安はますますつのつていった。

九歳になったとき、長兄ラムクマルは弟のためにウパナヤスウパナヤス聖系拝受の式を盛大にとり行なった。これで一人前のバラモンとして正式に認められたことになるのである。以後、家の祭神を礼拝することを許されたので、ガダイ少年は例によって全身全霊をうちこんで



チヨットパッダ工家の祭神 (左から)シータラー、シヴァ、ラグヴィル

礼拝と神前の瞑想に没頭する。家の神はラグヴィルと呼ばれて、ラグ族の英雄、即ちラーマの姿をとった宇宙の主ヴィシニューである。六歳、八歳、九歳のときと三度経験した入三昧サマーディは、この時分からかなり頻繁に起こるようになった。

神前で瞑想したり、人が讃歌を上手に歌っているのを聞いていたりするとき、突然圧倒的な歓喜に包まれて外界の意識を失う。また、一つの神に心を集中していると、心眼にその本当の姿が映じ、外部の感覚はたちまち激情の波に呑み込まれてしまうのであった。母親をはじめとして親類の人々は、脳の病気ではないかと心配するのだが、本人にしてみると全く自然的自発的なことなので少しも苦にならない。それに三昧の状態が過ぎると、直ぐに

元通りの元氣な平常に戻るのである。だから彼は親類の人たちに、この「発作」を気にしないようにと頼んだ。

三昧が度重なるにつれ、彼の精神にある神聖な感銘を残したにはちがいないが、そのため子供らしさが失われることはなかった。ガダイ少年の言語動作は常に自由快活で、その精神生活にさほど重大なことが起こったとも思われなかった。三昧に入ると超自然的なものに近づき、神性に触れると信じてはいたが、周囲から見ると、その日常には何も異常な点は認められないし、彼がいる所には笑い声が絶えず、その場が明るくなるので、誰からも好かれていた。この性質は生涯変わらない。

一般に宗教家または詩人がエクスタシーに入ることはよく記録されているが、これはすでに多くの修行や修練を積んだ場合に起こることである。ラーマクリシュナが幼いころからこのような状態に入ったとすれば、こうした方面に特別の知識を持たない家族の人が心配したのも無理はない。

ここで思い出されるのは、仏陀伝説のことである。仏陀が幼いとき、他の子供たちが嬉々としてたわむれている間に禅定に入った。そして時がたつにしたがつて他の樹々の蔭は移ったが、仏陀の上の樹だけは蔭を移さなかったという、あの伝説である。一般にラーマクリシュナの伝記

作者はほとんど意識していないようであるが、仏陀伝説との一致または類型といえよう。

ところが彼自身または弟子たちが意識的に仏陀伝説を模倣したとは全く考えられない。というのは、仏陀幼時の三昧のような仏陀に関する詳細な事跡を、彼らは何も知らなかったと信じられるからである。当時のベンガルにおいては、社会の表面に、「仏教徒」と称する人々がほとんどいなかった、後にラーマクリシュナはインドで行なわれていた各種の宗教宗派の奥義を自ら体得するのだが、そのなかに仏教が入っていなかったのは、その理由によるものと思われる。

仏陀の場合も、ラーマクリシュナの場合も、この幼時からの入三昧というのは、インドにおいて精神的大偉人の出現するとき、当然期待してもよい出来事なのである。言いかえれば、少なくともインド人の精神生活の上から見て、真の宗教家たるべき人についてある類型が要求されているということである。

父クデイラムの死後は、長兄のラムクマル夫妻が一家の全責任を負って生計をたて、老母の世話をし、まだ年少の弟妹たちを育てていた。ガダイについては、時おり意識不明の状態になることでもあり、父の教育方針を受けついで無理に学校に通わせようとはせず、本人のしたいようにさせていた。



ガダイ少年たちが演劇を上演していたマンゴー園

ガダイ少年は生まれながらにして美しいものに対する鋭敏な感覚を持っていたらしい。たとえば、村の壺焼き職人のところに通って熱心に土の像の作り方を学び、シヴァの小さな神像などを実に見事にこしらえて、遊び仲間といっしょに拝んだりしていた。神像の巧拙こうせつを批評することが上手なので、鑑識を頼まれることも時おりあったほどである。ことに愛好したのは、音楽

と詩と宗教劇で、これは一生涯続いた。

村には田舎芝居の小一座が三つあったが、彼は役者の真似をするのがたいそう上手で、終いには役者よりうまくなってしまった。真似だけでは我慢できなくなつて、仲間と語らつて演劇グループを作り、演出家兼俳優となり、野原の樹の下で上演する。女役でも何でもこなす。あまりうまいので、通りすがりの人などは、「あの少年はカルカッタの○○劇団にいたのではないか」と、全国的に有名な劇団の名を言つて村の人に尋ねたりする。村人はわがことのように得意になる、というふうであつた。プラーナ（神話）をはじめ、マハーバーラタやラーマヤナの筋をよく憶えていて、その語り

方は専門の講釈師カクも及ばぬほど実に魅力的なので、村の婦人たちは争って聞きたがった。

誰に教わったわけでもないのに、歌の上手なことは非常なもので、甘くやさしい声と絶妙な節まわしに、聞く人は誰でもため息をつく。これは大覚者と呼ばれるようになってからでも同じで、言行録『不滅の言葉』コタムリトの著者も、その中でしばしば「音楽の神もハダシで逃げ出すような」という形容を用いている。それらの古典は、ごく幼い頃父の膝の上でいくらか聞かされた部分もあるだろうが、大方は講釈師から聞いておぼえたものである。ベンガルの村々には講釈師がよくまわってきて、教養のない大衆を相手に説教したりプラーナ等の物語を聞かせたりする。これが人々の耳学問になつていたのである。

そのほかに、この地方ではチャイタニヤ派の影響が非常に強かつたと思われる。後年のラーマクリシュナに対するチャイタニヤ派の影響といふことは、なお研究を要する問題である。

チャイタニヤ（一四八五—一五三三）はベンガル州のナディアに生まれた宗教家で、はじめ哲学及びサンスクリットに造詣深い学者として有名だったが、悟るところあつて信仰生活に入り、形式的な宗教の殻を破つて、神との結合にもとづく愛の信仰——バクタイ信愛の思想を街頭で説教した。太鼓を鳴らし、旗を立て、キールタンと呼ぶ新様式の音楽に合わせて神を讚美し、人間の魂の憧れを歌い、またハリ・クリシュナと唱えながら市中を行進し村々をまわつた。多くの市町村民がこの列に加わり、中には興奮のあまり失神するものも出たという。

この派の狂信的な騒々しい礼讃行と、ラーマクリシュナの静的な瞑想生活との間には、一見何も共通なものがないかのように見えるかも知れないが、ラーマクリシュナの肉面的に強烈な信仰、十二年間の苦惱時代の激情、ことにクリシュナに対するラーダーの愛を身を以て体験したこと等、恐らく幼時以来のチャイタニヤ派の影響によるものではないかと想像されるのである。

しかし、この礼讃行を開始した当時はカーリー女神の崇拜者たちから嘲笑されたとか、またチャイタニヤはヴェーダーンタ・スートラの解釈において、「シャンカラはバーダラーヤナの真意（パリーマツダ）を曲解して化現説を以て解した」として、シャンカラの説に反対したと言われているから、カーリー女神の崇拜から出発し、シャンカラの哲学を学んだといわれるラーマクリシュナとは大いに軌を異にする^{こと}と考えられないこともない。しかしチャイタニヤは出身地であるベンガル一帯に最も強い影響を残したこと、ことに十七世紀前半以後、この派のなから多くのすぐれた讚美歌の作家があらわれ、民衆文学の形でこの地方一帯にバクティ思想が滲透していたことを思えば、ラーマクリシュナの幼少年時代に最も深い感銘を与えたのは、直接にチャイタニヤの教義ではないまでも、この通俗化された礼讃文学であつたらうと想像される。

先天的に宗教および芸術に対して鋭い感受性を持つ幼少年期のラーマクリシュナが、それらに強い感激を覚えなかつたはずはないと思ふ。後に、ベンガル出身の詩聖タゴールの詩にもチャイタニヤ派運動の詩が強く影響を及ぼしているのである。晩年の言行録の中で、ラーマ

クリシユナが歌ったり信者たちが合唱したりする宗教歌には、チャイタニヤ派のすばらしい民謡風の讃歌が数多く出てくる。

月日は移り年が経つ間に、チョットパツダエ家のなかにもさまざま変化があった。ガダイ少年が十二歳のとき、次兄ラメスワルが結婚し、次いで妹のサルヴァマンガラが九歳で嫁に行った。インドでは娘の結婚に大変な費用がかかる。父親が亡くなって長兄の代になってから、家の経済状態はどうも思わしくなかったが、このころからいちだんと悪くなっていく。しかし石女うまめだと思われていた長兄の妻が初めて妊娠したので、一家は喜びに包まれた。それも束の間、兄嫁は妊娠してから人が変わったようになり、老いた姑や弟の世話どころか、家事も投げやりになり、乱暴な口のききかたをするようになった。妊娠しているせいだろうと思つて皆は腫れはものにさわるようにしていたが、その兄嫁は月満ちて男の子を生むと、産褥さんじよくの床で死んでしまった。

生まれたばかりの赤ん坊の世話と家事一切は、六十近い母の肩にかかつてくる。ガダイは外に遊びに行くことがだんだん少なくなり、家で母親の家事を手伝つていた。すると村の婦人たちは機会をみてはガダイの家に来て上がりこみ、彼の歌や話をききたがつてせがむ。彼は婦人たちの希望をできるだけ叶えてやった。ガダイが何か母親の手伝いをしていると、彼女たちが

さつさとその仕事をして終わらせてしまふのである。

十をいくつか過ぎてても相変わらず子供供つぽく無邪気で、一見いかにも呑気そうだったが、彼は醒めた目で世間の有り様を観ていた。ことに女性というものを鋭く観察していた。

土地や財産が原因で人々は争い、仲のよかつた親せきも金のために仇同士となる。

「見なさい、金や財産は禍のもとだ。お前たち兄弟が仲よくやつていても、財産のわけ前をもらう段になるとイザコザがはじまる。犬どもが体をペロペロなめつこして機嫌よくしているところへ飼主が食物を投げてやると、たちまち咬み合いをはじめる」〔不滅の言葉〕一八八四年

五月二十四日より

やつと財産ができたかと思うと、病氣になつてあつけなく死んでしまふ。男たちは女房子供を養い、世間並みのことをしてやるために汗水たらして金を稼ぐ。男はその金のためにどれほど卑屈になることか。一生、女と金の奴隷だ。——そして、この世の「幸福」のはかなさ。「二日ばかりの」幸福を追い求めて人々はかけずりまわる。いったい何のために、何故、人間は性懲りもなく愚かなことをくりかえすのだろうか？——「ラクダが口から血をたらしたら流しながら、いつまでもトゲ草を食べているように」

それから女！ どんなに秀れた男でも、女につかまったら最後だ。いっしょに暮らしていると、男はどうしても女にはかなわない。いつの間にか支配されてしまふ。女というものは——

「放っておけば三千世界の隅^{すみ}すみまで食いつくす」

また一方には、無料宿泊所で会う出家修行者たちのような生活もあるのだ。彼らのなかには、身につけているのは腰布一枚、所持品は水筒と椀一つ、それからバガヴァッド・ギーターの小さな本が一冊だけという人もいるが、その人たちの眼の何と明るいことか。そして話すことの何と深く大きいことか。

ラーマクリシュナはこの十代の半^{なか}ごろには、出家するとまではっきり決心しないまでも、自分は決して「女^{カミニー}と金^{カンチヨン}」の虜^{とりこ}囚^なにはなるまい、粗衣粗食に満足して、神に仕える一生を送ろうと決意していたと思われる。

さて、長兄ラムクマルは父親の死後、一家の生計を支えるため悪戦苦闘していた。粗末な食事にやっと間に合うほどの収穫がある田畑は所有していたが、僧職としての謝礼だけでは、その他の費用がまかないきれない。生まれてすぐ母親に死なれた息子には、毎日牛乳を買って飲ませてやらなくてはならないし、母や弟の衣類も必要だ。すでに借金もかなりあるが、返すあてなどあるうはずがなかった。困り果てたラムクマルは、友人のすすめもあって、村の生活に見切りをつけ、単身カルカッタへ出て収入の途を見つけることにした。一八四九年のことである。友人が紹介してくれた僧侶としての仕事のほかに、学問に自身のある彼は、サンスクリット

の塾を開く。そこは大都會である。数人の生徒がすぐ集まったし、彼の学識と誠実な人柄が知れわたるにつれ、次第に仕事も生徒も増えていった。

ラムクマルは一年に一度は必ず村に戻って来て、二週間ほど泊まっていく。老母チャンドラマニ、弟ゴダドル、幼い息子アクシャイの様子を見、持ち帰った金で不足のものを補い、家の修理の手配などもして、またカルカッタへ帰って行く。何度かそれをくりかえしているうちに弟ゴダドルをカルカッタに連れて行こうと考えるようになった。仕事が忙しくなると、助手がほしくなったのも理由の一つだが、このまま弟を村におくことは、将来のためにならないと思つたからである。

もう十代も半ばを過ぎたというのに、いっこうに勉強する気配もなく、相変わらず気の合つた仲間や村の女たちを相手に、歌をうたつたりおしゃべりをしたりして呑気に遊び暮らしている。むろん、老母の手伝いも一生懸命するし、アクシャイの子守りもしてくる。しかし、よく見ると子守りと言うより、何のことはない、幼児といつしよになつて遊びたわむれているのだ。カルカッタに連れて行って、自分の助手としてバラモンの正規の仕事をおぼえさせよう。塾の手伝いもさせよう。そうすれば自然にサンスクリットもおぼえる気になるだろう……。

母や親類の人たちも賛成してくれ、本人にも異存がなかつたので、ラムクマルは吉日をボク卜して家神ラグヴィルにあいさつ申し上げ、弟をつれてカルカッタへ出発した。